

トラック島丸腰となり終戦日

三、四日経て米軍上陸、使役に使われる身となった。階級なくても米軍の指示により兵二十名程度だったか指揮して配管工事に就く。驚いたことは宿舎用水の配管その他においても全く感心しっ放し。備品その他についても手早く、やり方が違う、私たちの想像もつかないことをやっていたのける。

こうしたことが四カ月近く続いたが、この間の食糧は、幾ら兵が餓死しようとも使わなかった決戦食糧に手を付けどうにか凌いだ。米軍の援助はない、たまたま煙草、チョコレートをくれるぐらいであった。

年の瀬も迫る十二月二十日ころかと思いますが、いよいよ帰還とのこと。大隊本部は一番先に海防艦に乗船とのことで、その前に米軍の上陸用舟艇に乗らねばならず、米軍は浜辺で厳しい私物検査を始める。裸で禪までヒラヒラと前丸出して、どうにか将校、士官が乗船。動き出して海防艦乗船までに二人の米兵が腕時計を奪いに掛かった。一人が状況判断で時計を外し、ポケットへ入れて知らぬ顔をしていたが腕に跡が付い

ているので駄目。結局大隊長以下二十名全員の時計は巻き上げられ海防艦へ。

日本への帰国は、来たときとは違って早く、六日間ほどで着き広島へ上陸。軍歴書など整理し、正月に間に合うようにとの取り計らいで十二月三十日ひょっこり帰宅しました。

今は幸せに感謝の気持ちでいっぱいです。亡き戦友を偲び余生を送っていますが、今思うと考えられないことです。

砲兵科の志願下士官

ハルマヘラ島で船舶廠勤務

石川県 水口 久 助

私は農家の長男として生まれたが、父母、祖父母も健在であったので、小学校卒業の昭和十三年十月から、元片倉製糸、金沢の日本紡績に勤務した。しかし、大正十二年二月十七日生まれであり、十八年徴集であっ

だが、陸軍に志願をした。

なぜかという、勤めた日本紡績は女が主体の会社であり、男子の給料も安かったと思う。私の仕事は女工の下の仕事である。女工が床にこぼした水を掃除するのである。仕事はだんだんと変わったが、依然として給与は安く、日給四十銭か四十五銭だったと記憶している。金沢の工場の宿舎は一部屋十畳くらいの所に、同世代の者が三、四人寝起きしていた。

当時は支那事変も始まり、軍人が花形であったし、給与のためもあったかもしれないが、軍人になろうと思った。昭和十五年、志願をしたので、金沢から親の所へ手紙を出し、承諾書に印をもらい、願書を提出した。

身体検査は、一般の徴兵検査と同じだが、能登一円の人々が輪島に行った。結果は甲種と言われ、「甲種合格」と復唱し、いよいよ兵隊になるのだと思った。一般の徴兵であると乙種でも合格であるが、志願兵の場合は甲種のみが合格である。私の住む門前町から三十人ほど受けたが、合格は私を含め七、八人であったと思う。

昭和十六年三月一日、東部第五二部隊（金沢の特科隊）で、山砲隊は四、五、六の三個中隊、野砲は第一、二中隊、第三中隊は一〇センチ榴弾砲であった。部隊は金沢の市街地から福井寄りの方、南寄りか、砲兵が六個中隊あった。一個中隊は四個班で、古兵の中に入る。私の班には教育召集の補充兵が三人と、茨城県の三年兵がいた。

教育は初年兵だけで、初めから砲、通信、観測の三つに分けられる。初めに学科試験もあり、適性を調べられ私は通信となる。通信は有線だけであった。砲の側にいるが、連絡係である。従って師団参謀の所へ行くこともある。

通信は普段は馬を使わないが、朝晩馬の手入れをするので厩当番もやる。演習のときは馬を扱うが、特定の馬を固定していない。一期の教育は六カ月くらいだと思うが、検閲が終わって、第一選抜の一等兵となる。一般の現役と志願兵は一緒で別に差別されない。休憩のとき、煙草を吸っていたら「未成年者は煙草を吸うな」と曹長に注意された。班の中では、砲を扱う者も

通信も区別はないが、砲本科の古兵や上等兵は、我々通信や観測は「弛んでいる」と、ビンタも結構やられる。ビンタはスリッパでやられることもある。砲扱いの者は労働が激しく、キビキビやらねばならぬから、通信や観測は、弛んでいるように見えるのかもしれない。人数的にいても砲の方が多い。

検閲が終わると、志願の我々に「志願するかしないか」を聞かれる。その当時は戦況も急を要する状態となっていた時期だから（大東亜戦争）、志願者は全部採用された。前年までは豊橋第二予備士官学校となつたためか、私たちは、新潟県の高田山砲連隊の中の下士官候補者の班であるが、外に出ると下士官候補者隊となる。幹部候補生の乙種の人は金沢へ来ていた。

教育期間は九カ月間高田で行われた。ところが、士官学校から士官候補生が何人か来た。階級は同じでも、我々が先に敬礼させられた。どっちが先に敬礼するかで、やり合ったことがあった。

衛兵の教育を受けた。そのときは一緒にやるので、私と同年の小僧っ子だった。そうしたら、威張らなく

なり、両者間に宥和が出てきた。やはり士官候補生も士官候補者も同じ兵隊同志であると痛感した。

私は通信だったが、下士官となれば砲兵科全部習わねばならない。卒業するとすぐ兵長となり、伍長勤務兵長として腕に山型を付けることになる。昭和十七年の十月卒業して原隊の金沢に帰り、十八年一月一日伍長に任官したが、上に二等級の軍曹がいるから私は班付下士官として助教となり、補充兵教育を二度やった。本科一本の助教であるから、私は教えながら自分も勉強した。

昭和十八年九月、船舶司令部に転属が決まり、下士官二十人と横浜に行き、さらに広島の前司令部へ行った。司令部は字品であるが、兵舎は金輪島にあって、船舶兵の中へ下士官ばかり入っていった。我々は、直接の部下を持たぬ下士官である。司令部付きだから下がいない。金輪島の部隊長は大佐で、我々を待っていた。船に乗ったことのない者はかり二十人ほどが初めて船に乗った。そのときの大佐が戦地まで一緒でした。

新部隊の編成だったのである。日本コットという所

で、ベニヤ板の高速艇を製造していて、それに六百馬力の航空エンジンを二基付けるのである。私はこの製作にはたずさわらなかつたし、大発（日本の上陸用舟艇）を作っている所へ兵隊を連れて通つたのである。

ほとんど素人ばかりなので、技術者である徴用工員に教育させた。これらの人間を全部広島へ連れていった。

それは、昭和十八年十二月で、その指導、監督に渡辺曹長と私が行くよう命ぜられたのである。そのころを思い出すが、東京は靖国神社秋の大祭であり、旅館はいっぱい、泊まる所がなく、やっと、ある旅館に行き、布団部屋でもよいから泊めてもらいたいと頼んだ。そこでやっとのこと別の部屋へ泊めてもらった記憶がある。

もう一度整理して話してみると、昭和十八年十月（十九年二月までのことである。広島では大発にエンジンを付けるその監督。徴用工員が部下で、その人たちは自動車の運転手、修理工らが出た。そこで上陸用舟艇（大発）を作っていた。佐々木大佐の命令で、四百隻の大発を一列に並べたという。エンジンを付ける

のに苦勞した。私らは全然素人で分からなかつた。

作業は徴用工員の技術者がやってくれるが、私には部品の名前もよく知らない。「班長キャブレターがない」と言われても、初めは分からなかつた。しかし、伝票をつけて、部品を持ってくるのは私でなければできない。工員が行っても品物は渡してくれない。だんだんと分かつてきて、それで四百隻を作つて、二人は任務を達成した。

我々の仲間二十人の下士官は、本船の擬装に行つた者もあり、仲間の下士官がそれぞれ幾つかの仕事に分かれ任務を遂行したのである。私は「坂」という所に船を引っ張つてエンジンを付ける。そこに作業所と事務所があり、舟艇を本船に乗せて現地へ輸送した。

広島へは、それらの要員を集め、それを各船舶廠に分けられ、第一（第五船舶廠まであつて、私は第三船舶廠へ転属し、兵員共々字品の兵站宿舎のような軍隊集合所に集まつて、昭和十九年二月十日、輸送船に乗船し、二月十一日、字品を出航したが、我々には行き先が分からなかつた。

船は仮設航空母艦で一万トン級のものといわれていて、航行中のことは、台湾、マニラ寄港で、その間いつ沈むか分らないと、戦戦兢兢、対空、対潜警戒の日々であったが、特にショック的な出来事がなかったのは奇跡といえたかもしれない。その間の護衛は駆逐艦二隻、輸送船三隻の計五隻であったと記憶している。甲板には、宇品へ集めた「大発」を積んでいた。三月十日、モルッカ諸島蘭領ハルマヘラ島へ上陸することができた。

先発の船舶工兵隊も既に兵舎を建てていた。我々はそこへ泊まったこともある。我が隊は海岸に近い所、海のへりにいて、輸送船の修理や、大発の銃撃であいた穴などの修理をしていたが、ベニヤ板の特攻舟艇は見えなかった。私はグルワで仕事をしていたが、事務所、本隊は対岸の甲地区と呼ばれる所にあった。グルワには高橋大尉指揮で一個中隊いて、我々や徴用軍属や工員もいたし、兵器廠、貨物廠、船舶廠などの分廠があり、付近には台湾の兵補（正規ではない補助の兵隊）もいた。

ハルマヘラでの生活はまあまあであったが、私はマラリアに罹り、二十日間ほど、野戦病院に入院した。その間、甲地区が空襲になったので、本部はグルワに来て別の所に新しい宿舎を造った。グルワから新兵舎には徒歩ではなく船で行った。資材は甲地区へ置いたままにしてあり、空襲はあったが、艦砲射撃や上陸はしてこなかった。我々グルワの兵舎も危険になってきたので奥地に移り、各班二十人くらい入れる細長い兵舎を建て、終戦まで生活をしていた。

隣のモロタイ島の部隊が玉砕するときは、こちらも空襲、機銃掃射を受け資材などの損害を受けた。荷物は奥地へは運べず、海岸の砂場に置いてあった。ハルマヘラ島には、物資、燃料、弾薬等を最前線用に分散的に貯蔵されていた。燃料はドラム缶に入れてあり、搬出に便利ないように、海岸の椰子林の下に穴を掘り、上に土を掛け、さらに椰子の葉で覆ってあった。米や乾パンは湿気を防ぐため上床に積み、草色のシートをかけ、上空から見えないように集積されていた。

ところが、先に申した空襲を受け、曳光弾によって

油などに引火され集積所が焼けた。ドラム缶が焼け、誘発し、破裂する、ドラム缶が火に包まれどこへ飛んで来るか分らない。そのため、消火どころか、側へ寄ることもできない。さらにその火は他の物資に燃え広がるから手もつけられない。航空燃料のガソリンも石油も重油もほとんどやられてしまった。

米も、乾パンも想像以上に燃えた。消火するのに水もない、勿論ポンプもない。それ故、焼け残りを取り除くしか方法はない。航空補給廠の油も、貨物廠の食糧も焼けくすぶって食えなくなった。我々の仕事は敵機が去った後を取り片付け、整理するだけだった。しかし、物資集積所の物資は空襲の度に姿を消し、残念で仕方がない。飛行機には飛行機で応戦しなければならぬが、その飛行機もない。絶対的物量の差が歴然として現れはじめていた。

しかし、我が船舶廠の地下工場は何とか被害が少なく、発動機や旋盤、ボール盤（孔明け機）などの工作機は健在だったし、防空壕（横穴式）の電気は発電機で、その冷却水は地下の井戸から汲み上げた。冷却の

水は温水に変わるのでそれを風呂とした。その壕は手掘りで、硬い所はハッパで壊した。一個中隊全部入れる壕を構築したのである。居室の灯も発電機でやるように配線もしてあった。これは最後まで使えた。

しかし、食糧の主食はさつま芋を植えた、収穫したら、蔓をまた植える。これは本部からの補給がないから中隊でやる。上陸した当時は味噌、醤油も樽入りであったが、やがて粉末になったがそれも空襲で燃えてしまう。体の塩分も不足し、汗をかいても塩からくなくなつた。塩の大切なことを痛感したので、海岸から海水を取り、ドラム缶で煮立てて塩分を多くし、食糧製造の担当を決めた。しかし、海岸では空襲時発見されるので、海から二百メートルも奥地で作業をする。ドラム缶を支える石と燃料の確保には担当者は随分苦労したと、戦後書かれた「思い出」に書かれている。金より大切な塩であった。その塩は海岸から山の中の隊へ運ばれたので、何とか生き延びることができた。隣というか、ハルマヘラ島の入口の「モロタイ島」が玉砕してから、我々の所は空襲も減り、艦砲射撃も

なく、ひたすら現地自活で生命を保っていた。そのころになると、無線で、他の南方地域、レイテ島、ルソン島などの玉砕や敵上陸の情報が入ってきた。これで、我々の補給路は完全に断たれたと思った。原子爆弾とはいわぬが「何か爆弾」が投下されたことは聞いた。八月十六日になると、空襲や機銃掃射もなくなった。その代わりに「ピラ」が撒かれた。「ポツダム宣言」「天皇の命により終戦」「貴方たちは武器を捨てて家に帰るのを待て」などである。噂で、「男は金を抜かれる。女は……」というのもあった。「逃げよう、弾を持って行こう」などの話もあった。

しかし、終戦を知り、現地自活をしなければならぬと覚悟した。動物性蛋白質として、黄色火薬で魚を捕ったが食い切れないほどだったので他の班に分けてやった。主食は芋で、米は一カ年全然食べていない。航空燃料のアルコールを少し航空燃料廠からもらって酒の代用にすることもあった。

いよいよ復員船が来た。いざ乗船というときになり、私と兵五名は残れとの命令であった。六人取り残され

たが、物音一つしない、これほど寂しいことはなかった。武装解除のとき、兵器、弾薬をここへ置けと置かれ、これを船で海へ捨てなさいという簡単なものだった。しかし、壕の中に置いてあったエンジンや工作機械は皆、そのままであったが、あれはどうなったのか、と今でも思うことがある。十日ほど後に残された我々六人は、全部溶接で作られたリバティー51（上陸用舟艇）に乗船して出航した。

昭和二十一年六月二十日、和歌山県田辺港入港。上陸したら、三百円と、家までの切符一枚をもらって帰途についたが、京都までは復員者のみの車両。京都から「石川・福井・富山」の二十人ほどは、一般の人は窓から入り、復員者の坐る所がない。そのため、一般客を立てせ、復員者は坐らせてもらった。金沢まで六時間くらいかかったように記憶している。

金沢で同年兵がいて、親戚に一泊させてもらい、手持ちの米をお礼として置いて帰った。家へは電報を打とうと思ったが、内地の物価が分からないので打たなかった。家では、我々の部隊長が少将になっていて内

地に帰られるとき、部隊の全員に、自宅あての手紙や葉書を書かせ、それを持って、内地で出してくれた。

そのため、月日が書かれていないが、自宅へ着いていた。家では、私が手紙を書いたときは私が生きているということだけは分かって幾分安心したらしい。弟は既に南支から帰ってきていた。私は、復員以来、農業を継いで生業に励んでいたが、門前町の大洪水の被害は大きく、泣くに泣けぬ苦労はしたが、何とか回復させ現在に至っている。

【解説】

〔野戦船舶廠〕

野戦船舶廠名

通称号

勤務地

○第三野戦船舶廠 暁六一九四 宇品―ハルマヘラ

同 第一支廠 マノクワリ

同 第二支廠 ケイ島トアール

同 第四支廠 宇品―濠北方面

同 第五支廠 宇品―ジャワーセレベス

同 第一―第四移動修理班

○第一野戦船舶廠 暁二九五―

宇品―ラバウル―第八方面軍

○第二野戦船舶廠 暁二九四四 昭南

同 第一支廠 蘭貢―昭南

同 第二支廠 宇品―西貢

同 第三支廠 スラバヤ

同 第四支廠 宇品―バレンバン

同 第五支廠 宇品―ベラワン

同 第六支廠 宇品―泰―シンゴラ

同 第七支廠 昭南―バンコック

同 第八支廠 宇品―海防―仏印―ツ―ラン

同 第一―第四移動修理班

○第四野戦船舶廠 暁六一九五

宇品―マニラ・アンボン―小樽

同 第一支廠―第四支廠 主として北方地域

同 第一―第三移動修理班

○第五野戦船舶廠 暁一九八〇六 マニラ

同 第一支廠 マニラ

同 第二支廠 セブ島

同 第一・第二移動修理班 マニラ

○第六野戦船舶廠 暁一九八〇七 上海

同 第一支廠 漢口

同 第二支廠 上海―秦皇島

同 第三支廠 上海―鎮江

○第七野戦船舶廠 暁一九八〇八 台湾基隆

同 第一支廠 冲繩支廠

同 第二支廠 高雄支廠

同 第三支廠 淡水支廠

同 第一・第二移動修理班

○第八野戦船舶廠 暁一九八二一 九龍

同 第一支廠 九龍―長州島

同 第二支廠 九龍

同 第三支廠 九龍

同 第一・第二移動修理班

○第一〇野戦船舶廠 暁六一九七 羅津鏡城

第一一野戦船舶廠 暁六一九八

門司―釜山・木浦・仁川

門司―博多・仙崎

[船舶工兵連隊]

○船舶工兵第一八連隊 暁一六七〇二 ハルマヘラ

○船舶工兵第一連隊 暁六一七〇

ガ島―ニューギニア

○船舶工兵第二連隊 暁六一七一

ボーゲンビル島

○船舶工兵第三連隊第三中隊

暁 二九五六 ラバウル

○船舶工兵第四連隊 暁 六一七二

西ニューギニア

○船舶工兵第五連隊 暁 六一七三

西ニューギニア、マダン

○船舶工兵第六連隊 暁 六一七四 天寧

○船舶工兵第七連隊 暁 一〇六五一 ケイ諸島

○船舶工兵第八連隊 暁 二五〇三 ニューギニア

○船舶工兵第九連隊 暁 九四二二 ニューギニア

○船舶工兵第一〇連隊 暁 九四二二 アンダマン

○船舶工兵第一一連隊 暁 一七五〇 モールソン

○船舶工兵第一二連隊 暁 二九五八 ラバウル

○船舶工兵第二三連隊 暁 六一六一

フロレス島マルメラ

○船舶工兵第一四連隊 暁 六一六二 ジャワ

○船舶工兵第一五連隊 暁 六一七六 泰国

○船舶工兵第一六連隊 暁 一六七〇 サイパン

○船舶工兵第一七連隊 暁 一六七〇 父島

○船舶工兵第一九連隊 暁 一六七〇 ミンダナオ

○船舶工兵第二〇連隊 暁 一六七一 セラム島

○船舶工兵第二一連隊 暁 一六七一 比島

○船舶工兵第二二連隊 暁 一六七四

柳井―野田、静岡―伊東

○船舶工兵第二三連隊 暁 一六七四 沖繩

○船舶工兵第二四連隊 暁 一六七四 比島

○船舶工兵第二五連隊 暁 一六七四 比島

○船舶工兵第二六連隊 暁 一六七四 沖繩

○船舶工兵第二七連隊 暁 六一五一 北海道

○船舶工兵第二八連隊 暁 一六七五 比島

○船舶工兵第二九連隊 暁 一六七五 九江

○船舶工兵第三〇連隊 暁 一六七五 台湾

○船舶工兵第三二連隊 暁 一九七四 比島

○船舶工兵第三三連隊 暁 一九八一 上海

○船舶工兵第三四連隊 暁 一九八一 汕頭

○船舶工兵第三六連隊 暁 一九八三 木浦

○船舶工兵第三七連隊 暁 一九八三 仙崎

○船舶工兵第三八連隊 暁 一九八三 釜山

○船舶工兵第五七連隊 暁 六一五五 函館

〔改海上機動第三旅団輸送隊〕

○船舶工兵第五八連隊 暁 六一七五 新潟

改泛水作業隊

明号作戦

仏印シタデル兵舎攻撃

富山県 小坂 儀 一

生家は農業を営んでおり、私は、農家の長男として大正四年十二月十六日、富山県射水郡小杉町戸破四七七〇で生まれました。長男ではありませんが、農業に